

トランスナショナル・フィリピン人の民族誌 —国境を越える日常の「戦術」—

永田 貴聖

本研究は、人類学者が「日常的な調査」を実践し、人々の「戦術」に関与することが、世界を覆っている搾取と抑圧の構造に基づいた、日本人とフィリピン人の序列関係を変化させる僅かな可能性になることを模索する試みである。

1980年代以降から現在にかけて、トランスナショナル・フィリピン人は日本・フィリピン間を双方向的に移動し、国境を越える実践を展開している。80年代以降、フィリピン女性が契約労働者として来日しはじめ、女性たちの一部が日本人と結婚し、定住化した。その後、フィリピンで育った、日本人とフィリピン人を親にもつ二世が来日し、既に、定住しているフィリピン人女性を媒介として、社会関係を広げ、日比双方を往来するライフスタイルを確立しつつある。人々は、フィリピンから日本に移動する中において、搾取と抑圧の構造と向き合いながら暮らしている。

トランスナショナル・フィリピン人は、支配する側に位置する日本人と係わり、双方の関係を変容させる「戦術」を実践している。人々は、集団ではなく、個人を単位として来日し、日本人だけではなく、日常別々に暮らしているフィリピン人たちと関係を形成している。人々は、国家による管理と向き合い、限定された権利を最大限に行行使するため、自身の社会関係に外国人支援を行う活動家や研究者など、多くの日本人と介在させているのである。

筆者は、従来的人类学が実施していた、「非日常的な調査」を実施すること、さらに、調査の対象とする人々を「未開」な「文化」を操る人々として、周辺化することを放棄したい。人類学者は、これまでの人類学が、「非西洋」の人々を周辺化することに加担してきた人類学的な知や、限定されて保障されるようになった権利を行行使するための知識を、日常的に係わる最も身近な周辺化された人々に、「日常的な調査」を実践することにより、伝え、人々の「戦術」に関与すべきである。そして、人類学者が関与する「戦術」を、「個人を中心とする民族誌」に記述する。